26

整骨新書以前の骨学

木村　明彦[1)]，木村　直明[2)]

[1)] 解剖学史研究所，[2)] 順天堂大学大学院医学研究科

昨年の本総会にて「整骨新書」の骨学を中心とした解剖学について報告した．その際，同時期の整骨書として「家法難波骨継秘伝」（1770），二宮彦可（1754–1827）の「正骨範」（1807），加古良玄（不明）の「折肱要訣」（1810）について簡単に紹介した．今回，高志鳳翼（不明）の「骨繼療治重宝記」（1746），宋慈（1186–1249）の「洗冤集録」（1247），「醫宗金鑑」（1739）正骨心法要旨などを含めた東アジアに於ける骨学観を比較検討をおこなった．

東アジアにおける骨の記載は「黄帝内經霊枢經骨度篇」であるが，本書での記載は經穴の位置を確定するためであろう．南宋時代に記述された「洗冤集録」は世界最古の法医学書とされるが，檢骨圖格には頭頚部20語，体幹11語，上肢13語，下肢10語計54語が記載されている．「醫宗金鑑正骨心法要旨」の第八十七巻は霊枢經骨度尺寸であり長さについてだが，八十八巻から八十九巻には頭面部（頚部も含む）で20語，胸背部で9語，上肢で7語，下肢で9語の計45語が記載されているが，耳や陰嚢など骨でないものも記載されている．沈トウ（1688–1752）の「釋骨」（1750［1798本邦出版］）は内經を参考に骨の解説を行い，更に説文解字などより字の意味合いなどを考証し，骨の名称及び経穴について改訂などを述べている．整骨書では「正骨範」では「醫宗金鑑」からの記載を継承しながら，唇口（口唇），玉堂（上顎骨下部？），耳（耳），玉梁骨（外耳道前部），兩釣骨（頬骨弓），蔽心骨（剣状突起），陰嚢，竹節骨（指節骨）など骨でないものを中心に省いている．「骨繼療治重宝記」では頭面部で29語，胸背部で23語，上肢で12語，下肢で19語の計83語であり，「家法難波骨継秘伝」，「折肱要訣」も同じ図を用いているが，ただ「折肱要訣」では「解體新書」を参照したと思われる図も用いられている．シーボルトと交流のあった石坂宗哲（1770–18432）は「骨經」（1819）を著し，其の序に「但し憾むは，内經の古訓に據らず．故に骨名正からず，猶老佛之孔聖に於なり．今，二子製する所木骨及び圖説（幕府醫學館に献納された星野良悦の身幹儀，各務文獻の模骨・整骨新書）を按じて，其の侏離鵙舌を芟除し，悉く諸れ内經正文に本き而して始めて理定名の正しきを得たり．且傍ら釋骨中の拾う可き者を擇び，著して一巻と爲し名づけて骨經と曰ふ．竊に以爲らくば，聊内經の闕典を補う．」とし，骨度の為の骨理論を解剖学的骨学に移行させている．

一方，西洋に於てはAndreas Vesalius（1514–1564）のDe Humani Corporis Fabrica（1543），William Cheselden（1688–1752）のOsteographia or the Anatomy of Bones（1733），Bernhard Siegfried Albinus（1697–1770）のTabulae sceleti et musculorum corporis humani（1747），John Bell（1763–1820）のEngravings of the bones, muscles, and joints（1810）などに詳細な骨学の記載がある．この両者の差はいずれからであろうか？ おそらく骨度法における骨学は治療のポイントを求めるための体表指標としての骨学であり臨床応用が主目的であり，他方西洋の骨学は骨の形態を詳細に理解する目的であったのであろう．

（COI：なし）